

「英雄たちの大集会」の報告および1964年度

「英雄たちの大集会」の提案

「英雄たちの大集会」を整理し、ニューヨークでの「英雄たちの大集会(仮称)」の地点を明確にしたいと思う。その為には、どうして「英雄たちの大集会」が開かれたかを説明しなくてはならないだろう。

1961年9月10日発行の『九州派』5号『来年は九州に』の中に『美術の世界ではオリジナルとか、個性とか、それはフランスから帰るたびに、またはどの展覧会評を見ても、書いたり、しゃべったりしたものだが、私達は色々の理由のもとに個性とは無関係なものになりたいと思って、色々の方法を捜しています。九州へ遊覧ください。かならずや御期待にそい得ると思います。』と述べ、同時に同年開いた東京・銀座画廊『九州派展』レセプションで『英雄たちの大集会』を九州で開くことを公表した。同年のグループ展での作品にも、その傾向は出ていたと思うが、当時の議論の的はアンチ・タブロと思想性の確立で、オチ・オサムガラスの箱の煙草のスイガラのカビの形而上学的美学、小幡英資の空の真黒い大きい箱の釘づけ、エンパイヤビルみたいに小さい四角の窓が無数にあげられた長頼子の二個の作品、大工に作らせた一对の塔一桜井、など、主流は部屋の概念に、もっとも興味をそそいでいた。

それが一番最初になされたのは1960年佐藤画廊でのオブジェによる部屋を提出したオチ・オサムの個展であった。それ以前は裏表の作品で、それからの発展である。ひそかに、それらの作品に自信を持ち、発展を企てていたからこそ、次は自由な立場での九州発表を考え、その基本を作品製作の動機、あるいは作家の哲学の発掘においた。そのため議論、作品批評の段階では、すでに二年間が準備に費やされたのだ。一九六二年になり、それがようやく固まりだし「英雄たちの大集会」のパンフの中にも掲載した「英雄たちの大集会の提案=九州派会合通知」となった。それと同時に実際面でのトレーニングをかねて米倉徳=オチ・オサム二人展、桜井孝身と詩人の赤沼章展、尾花成春個展、地元での『九州派展』をそれぞれひらき、その考えを確かめた。その中の一、尾花成春の個展について報告しよう。

尾花成春個展といっても、トレーニング的意味での催しなので内容は『英雄たち』を意義づけたものが殆どであることは、いうまでもない。